

Title	コレクション中川2: 「ある戦いの記録」から皮肉屋 との対話
Author(s)	中川, 雅道
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 35-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ある戦いの記録」から皮肉屋との対話

中川雅道

内側からの声

運転手さんに挨拶して、バスから降り る。これから大学に向かい、数名の人たち の話を聞きにいく。急峻な瀬川の坂が立ち はだかり、足を止めた。瞬間、その日に起 こってしまったことが、まだ胸の中に燻っ ていることに気づいた。バイクが後ろから 追い抜いていく。小学生がだらだらと正面 から歩み寄ってきて、通り過ぎ、背景に消 えていく。

「みんなの意見が痛かった」。

この言葉を、学校の保健室で聞いた。 授業で、生徒たちが出したテーマで話し 合った直後のことだった。わざとなのか偶 然なのか、そのテーマはその子ひとりを責 めるものだったのだ。そのことに、授業が 終わるまで気づくことができなかった。そ してなんと、その日の授業は活発に意見が 出て、良い議論だったと思っていたのだ。 気づけなかった後悔が、胸の中に溜まって ゆく。

目の前で泣いている人。

「みんなの意見が痛かった」。

ちりちりと、ストーブが鳴いている。 口から声が出てこない。胸の内で複数の声 が谺する。 ——お前がやりたかった対話 とはこんなものなのか。 --- 違う!おれの 力不足なんだ。ほんとうは哲学はもっと 深淵にふれるような何かなんだ。 — 現に 授業は純粋な悪意に支配され、利用され ているじゃないか。こんな授業やめてし まうほうがいいだろう? --- おれが未熟な だけなんだ。やりかたを変えれば、やり 方さえ変えれば。—— どこにそのやり方が?

「嫌なことがあったら、授業の途中でも 保健室に行ってくれればいいから、無理す る必要はないから」と乾いた声が出る。何 かについて話すことは、切実な問題を生む。 どのような声であっても、人を深く傷つけ る可能性がある。何度うまくやろうとして も、避けることができない事態だ。重責か ら生まれる内面の声は執拗に響き続ける。

思い直して、坂を登る。

インタビューの始まり

えっと、それじゃあインタビューを始 めます。質問は、いくつかあります。洛星 高校の授業に関わるようになった経緯と、 関わってから自分に変化があったかを聞き たいと思います。話す順番は適当で!

なぜだろうか、さっきまで響いていた 声がいったん収まる。

洛星高校の土曜日の講座で、哲学の授 業を行っているメンバーの話を聞きたく

なって、カメラを構えている。自分と似た ことを続けている人たちは、授業に向かう 中でどんなことを考えているのだろう。そ のことが、とにかく聞きたかった。



桂さんとは昨年度、何度かいっしょに 授業をした。確か、桂さんを授業へと誘っ たのは自分だったような気がする。「誘わ れたら断らない」という主義を貫いて洛星 高校を訪れた。 — 今年度、継続して洛星 高校に行ってみて、どんなことが変わりま したか。――臨哲の研究室が嫌いになりま したあ。

人数はめっちゃ多いのにキホン孤独。 けっこう毎回の授業、問題あるんです けど、臨床哲学のメーリングリストで 投げても誰からも何にもないし。教育 に興味ないひともいると思うけど、な にこれって思う。共有のために、みん なわざわざ時間をかけてメールで流し てるのに、まず読んでるのかもわから へんし、読んでたとしたら教育には興 味なくても臨床哲学に興味をもって関 わっているんなら、おもろいって思え るポイントってあると思う。

確かに、今年度の報告の勢いはすごい ですよね。ミーティングの報告まで出して くれるとは思いませんでした。ミーティン グや授業に参加できないので、すごく参考 になってありがたいですよ、と言ってみた ときに、これってみんなのリアリティなん だろうか、と引っかかる。他の方は、この ことについてはどう思いますか、とふって みると、桂さんへの質問から話が進む。

研究室が閉じてるってこと?--- 閉じて るんやったらかわいいんやけど、人がお らへん。 — 肩に手をおきたい……肩がな い!っていうかんじですね。 --- 虚空に向 かってしゃべってる気がしてくることはあ りますね。 ― おってくれたらそれでいい んやけど。なんかさみしい。 — なるほど、 やっぱり周りの人たちの無関心ってリアリ ティがあるんですね。

そういえば、昨年度に洛星高校の担当 者をやっていたとき、同じ悩みに直面して いた。情報を共有したい、そして自分の授 業がどんなふうに見えるのかを聞きたい。 そういうふうに意思表示して、リアクショ ンがなければひどい孤独感を感じる。

そして今、自分が抱えている問題もこ の延長線上にある。基本的に、学校の授業 はひとりでするもので……そこで起こった ことを誰かと共有することが難しい。だか ら、ひとりで考える。自分の中の皮肉屋が 姿を現す。皮肉屋は容赦なく、現実を捉え る。彼は言う。つらいならやめてしまえば 良いのに。でも、もうひとつの声は、こん な甘いことを言う。そうじゃないだろう、 この活動には意味がある。その意味に気づ いていないだけじゃないのか。

おもろくなる

意味、どこにあるだろうか。それを探 しに、ここで、語られる言葉を撮っている のだ。

え一、それじゃあ、次の人、豊泉さん お願いします。——豊泉さんが、洛星高校 の授業者に加わることになったのは大阪大 学で開講されている授業、対話技法論が きっかけだった。 — 対話技法論で、なん ていうか、もう答えが出ているはずなのに、 その答えについて質問されることで「分か る」ことがあって、それが気持ちよかった んです。それで洛星に行くようになりまし た。 — 洛星に行ってみてどんな変化があ りましたか。

すごい私的なことなんですけど。親が めっちゃ厳しい人だったんですよ。な に言っても頭ごなしに否定されるって いうか。それであんまり人と話さんく なったんです。自分の言っていること は絶対に理解されへんっていうか。そ んなベースがあった中で対話技法論に 出て話し合いをしてて、すごい楽しかっ た。実生活の中で対話ってめっちゃ重 要やなって僕は思うんです。

洛星高校での体験が、私的なこととし て前置きされた「父と話せないこと」と重 ねながら話される。近親者との理解が隠さ れたストーリーなのだ。——対話には技法、 ルールがあって、学校で授業をするんやか

ら、そのルールを教えに行くと考えてまし た。 — でも、ちゃうなって。

洛星に行っている間は、対話の技法を 学べば、対話ってできるんじゃないか なって思ってました。でもちゃうなっ て。お父さんと話し合いがでけへんかっ たんは、お父さんが対話の技法を知ら んかったんじゃなくて、単純に僕が 話し合えると思ってた立場がお父さん にとっては全然話し合える立場じゃな かった。対話の場の成立って何なのか なって考え始めました。

対話を実際に行ってみるとは、ただ何 かを教えにいくことではない。対話の成立 とは互いに話し合える立場をつくることな のだ。

人と人が意見を言うかたちになれば誰 でもが対話できるって思ってたんです けど。そうじゃないなって。その人を 好きか嫌いかっていうだけで話されへ んやんって。そいつのことが嫌いやっ たら、そういう場があっても話したく ないわ、こいつとはって思うし。今は、 話したくない人とどうやったら話がで きるのかなっていうところに自分の意 識が変わった。話している人がおもろ かったら、話できるよなって思って。 おもろくなるしかないかなって。話す ほうがおもろくなったら、聞くほうも ちゃんと聞いてくれるかなって。

豊泉さんの変化は、話す条件へと意識 が向いたことだ。知らない人へ向けて、 知っている人が何かを教えるという教育 観から、そうではないところへ。生徒た ちが持つ好悪という感情や、語る人がお もろくなることといった、話すものの条 件を整えるという見方へと変わっていく。 教室で生じるできごとを見る目が変わっ た。そしておそらく、この変化は豊泉さ んの語った、父との対話へのひとつの姿 勢なのだろう、あるいは。

そして、この語りを聞いたことで、孤 独がひとつ去った。自分の考えていたこ とが明らかになる感覚を信じて、対話の 授業を繰り返してきた。その魅力を語る 人が現れた。自分一人ではなかった。そ のことが、心を暖める。

シークワーシャーとほっぺたと

今年度に初めて洛星高校の授業を訪れ た山本さんは初めての授業が自分には向 いてないと思った。 — たぶん生徒がこう 言いたいんやろなってことを授業をしに 来ている人たちが誰も何も言わない。もっ とこう言ったらいいのにっていうのが気 持ち悪くて、この授業で何がしたいのか が分からなかった。 ― それで、山本さ んはしばらく洛星高校には行かなかった。 そんな彼が久々に訪れた授業で「シーク ワーシャージュースは新しいか」が議論 されていた。

シークワーシャーの授業が純粋に参加 者として面白かった。教える側とかそ

ういうのを抜きにして面白かった。面 白いっていう感覚は、こいつこれが分 からんかったんやっていうのが、教える 側も教えられてる側もわかる瞬間って いうのがあって、それがすげー気持ち いい。このことを経験した後、この子 が何を言いたいのかを見るようになっ た。そのことに真剣に向き合えるよう になった。



--- その感覚よくわかります。なぜかは 分からないんですが、現代文の授業をして いてもたまにそういう経験をしますね。あ の瞬間は何ものにも代え難い。対話の授業 でも同じで、みんなが話されている論点の 大事さがはっと分かる瞬間があって、その 瞬間を味わいたいがために、授業をしてる ようなもんですよ。 — ついつい、カメラ を持つ手に力が入る。そして、またひとつ、 共感することができ、孤独は去っていく。

他の人たちに質問です。これから、やっ てみたいことってありますか?---その場 で何を話したいのかを出して、それを続け ていくことをやってみたいです。先生のほ うが生徒のほうにインクルードされてい くっていう体験をしてみたい。

この言葉を聞いて、カメラを撮りなが ら、ある日の授業を思い出していた……

「なぜほっぺたは赤くなるのか」。笑い 声がおこる。どうやら、発言した子はよく ほっぺたが赤くなって、周りから冷やかさ れるらしい。「先生、今日はこれでいきま しょう!! うーん、この問いで何について 話せるんやろか。まぁでも、やりたいのな ら、やってみようか。

「いっつもエロいこと考えてるからや ろ一。」やっぱり冷やかしか。さーて、こ の空気をどうしたらいいもんか、と考えな がらしばらく観察していた。あいかわらず、 エローイとか言いながら数名がふざけあっ ている。何かが引っかかったのか、発言す る人が。「でも、ほんまになんでほっぺたっ て赤くなるんやろ?」真剣な調子で繰り返

空気が変わった。「せやなー、まず、ど んな時にほっぺたって赤くなる?」と試し に尋ねてみる。「恥ずかしくなったとき!」 「失敗して動揺したとき!」「好きな人が近 くにいるとき!」 --- 心の状態が顔に出るっ てことなんかな? --- でも、なんで心が出 ちゃうんかな。それって隠しときたいもの で、動物としては劣ってるよね。 -- 心と 体はつながってて、だから、不利な感情も 人に伝えてしまうんやと思う。 — 隠すこ とができるときもあるから、やっぱり心と 体はつながってないとおれは思うけど。

デカルトさんの登場か、とぼんやり考 えていたらチャイムが鳴った。心と体の関 係か、おもろいな、まさかほっぺたからこ こまで辿り着くとは、とつぶやきながら職 員室に戻る……。

カメラを構えながら、少し饒舌にしゃ べってしまう。 — 生徒の側から出た意見 を授業でそのまま扱って、失敗する時もあ るけど、うまくいったときのクラスの盛り 上がり方はなかなかですよ。ぜひ、来年度 から、積極的に試してみてくださいねー。— - 自分の経験から誰かにアドバイスする。

このことでまた一段と孤独は薄れる。

皮肉屋

カメラを片付けかけた時に、またまた 例の奴が声をかけてくる、でも。

ところで、そろそろ授業をやめてしま う覚悟はできたかい? ― 残念ながら、君 の皮肉の出番はなくなったみたいだぜ。さ いなら。